



日本記者クラブ 記者会見

政治と文学

高行健

ノーベル賞作家

2010年9月27日

中国語で創作する作家として初めてノーベル文学賞を受賞した高行健（Gao Xingjian）さんが記者会見した。国際ペン東京大会 2010 に招かれ、初来日した。

高行健さんは政治と文学の関係について、「文学は政治と切り離されたものでなければならぬ。政治の介入や市場の制約の中で、文学は政治やイデオロギーを超越すべきだ」と述べた。現代が抱えるさまざまな問題に「解決策がみつからないと認めざるを得ない。思考の危機の時代といえる」「覚醒した認識に意義がある。認識する努力を怠らない。それしか方法がない」と語った。質疑応答では、天安門事件▽日本の印象▽南京大虐殺▽川端康成、大江健三郎、村上春樹ら日本作家の評価▽中国の発展とナショナリズム▽鲁迅▽文学は世界を変えるか▽作品の中国国内での出版——などさまざまな質問に丁寧に答えた。

司会 日本記者クラブ企画委員 坂東賢治（毎日新聞）

動画は日本記者クラブホームページ <http://www.jnpc.or.jp> からアクセスできます。

© 社団法人 日本記者クラブ

司会（坂東賢治） 中国出身で、現在フランス在住の作家で、2000年のノーベル文学賞を受賞されました高行健（Gao Xingjian ガオ・シンジェン）さんが、国際ペンクラブ大会のために来日されております。この機会にぜひ日本記者クラブでの会見を、と実現いたしました。司会をします企画委員の毎日新聞の坂東と申します。

日本ペンクラブ会長の阿刀田高先生にもいらしていただいております。まず阿刀田先生から、きのう開幕しました国際ペンクラブの大会も含めてお話をいただきます。その後、高先生に30分ほどお話をお伺いして、会場の皆さんとの質疑を行いたいと思います。

それでは、阿刀田先生から、よろしく願いいたします。

国際ペン東京大会と高行健氏

阿刀田高 すでに、いろいろなところでお会いした記者の方もいらっしゃるんですが、ほとんどそういう前提はあまりないこととして、若干お話を申しあげますと、国際ペンそのものは、1921年に第一次大戦直後の非常に厳しい政情の中で、イギリスに誕生して、もともとは言論の自由、このごろは言論だけではないので、表現の自由ということをよく用いますけれども、言論の自由ということを経験して誕生した、当時はヨーロッパ中心でしたけれども、国際的な団体であったわけです。

それ以来、活動が続けてきて、今回が76回目の大会を催すことになった。日本ペンクラブはここから誘いを受けまして、1935年に——1935年という年は日本にとっても相当厳しい状況であったわけですが、そのときに、国際的なつながりを、せめて文学の面だけでも保っておこう、ということでここに参加して、非常に苦しい時代もありましたけれども、とにかくきょうまでずっと続いております。75周年に、日本ペンクラブとしてはなっております。

毎年、国際ペンという団体が、世界のどこか

で年次総会をやっているわけです。本来、国際ペン大会と申しましたら、この総会をやる、年次総会を中核とした会議を指しておりまして、いろいろな国で、いろいろな都市で行われているわけです。ちなみにいえば、去年はオーストリアのリンツで開かれておりまして、ここで、東京でやるようにという、まあ私どもも形式的には立候補をしたわけですが、国際ペンからも、ぼつぼつ東京あたりでやったらどうだというような話もありまして、それで2年ほど前に覚悟を決めて立候補いたしまして、リンツで認められて、ことし東京でやるということになったわけです。

それで、年次総会、それだけをやっていればいいのですけれども、基本的にはそうなのですが、それではあまりにも文学者の集まりとしては情けない、寂し過ぎるということで、どの土地でもそうなのですけれども、文学フォーラム、文学の催しを行っているわけです。これはそれぞれの国のいろんな事情によって、本当におごなりのときもありますし、盛大に行うこともありますが、東京は、日本は、この点に関しては最も盛大にやるほうの国で、ぼつぼつ日本でもやってくれないかということをいわれた理由の一つは、ちょっと国際ペンも沈滞気味であるから、日本あたりが喝を入れてくれないか、という意味合いも当然あったかと思います。

それにこたえまして、もうすでに文学フォーラムを、この部分は日本ペンクラブが主催いたしまして、早稲田大学が共催という形で、23日から25日まで、きのうだって、ある部分は日本ペンクラブの主催とっていいと思いますが、きのうがちょうどその境目で、日本ペンクラブの主催をしている文学フォーラムから、国際ペンが行う年次総会へと移った節目であったわけです。

その節目のところで、文学フォーラムでは、6人の作家の作品を映像や音楽や、いろんなパフォーマンスを交えながら、1日2作品ずつ紹介して、延べにして2,000人を超える、会員はもちろんのこと、日本の文学を愛好する方々においでいただいて、そういうパフォーマンスを終えまして、そしていよいよきのうの夕刻から

国際ペンのほうの大会が始まる。

大会のウェルカムパーティーを夜やりましたが、その前に、当然こういう会でありますので、基調講演と申しますか、この大会を飾る一種のセレモニー的なものを行おうということで、日本側からは井上ひさしさんの『水の手紙』という作品を、これは群読劇、何人かの人間が読むというものですが、日本側でどうしようかと。本当は井上ひさしさんに基調講演をしていただくという意図を、1年ほど前には持っていたわけです。病状がだんだん悪化すると聞いて、ちょっとそれは無理だろうと。じゃ、ドラマを、講演を「講演」ではなくて「公演」だっというじゃないかと、日本側としては井上さんの芝居を公にすればそれで一つの公演ということになるんじゃないかということで、井上さんの群読劇を上演する。栗山民也さんの演出で国立第二劇場の研究生たちを中心に、そのドラマを上演しようということを企て、当初は、井上さんに病院からはってでも出てきてもらおうということを考えていたのですが、残念ながらはって出てくることもできなくなってしまいましたので、まあそこところは、じゃ井上さんの、これは今回「環境と文学」というのがテーマでしたので、本当に環境と文学にふさわしい世界の水がどんなふうに涸れていっているかということ、群読劇で演ずるものだったので、それを、日本側からのパフォーマンスといたしました。

その後、奄美の高校生たちが演ずる、非常な激しい太鼓の、島の歌を歌いながら太鼓をたたくという、スタンディングオベーションが出るというすばらしいパフォーマンスを挟みまして、その後に、従来、こういうときには必ず行うことになっている基調講演を、高行健さんと、それからカナダのマーガレット・アトウッド女史にお願いしたということで、2つともすばらしい、それぞれの文学観を伝える講演をやって、そしてその後、ウェルカムパーティーで、いよいよこの国際ペン大会が開かれたというわけです。

きょう午前中から、すでに国際ペン大会は本来のスケジュールを行い始めていまして、まず

とりあえず委員会がたくさんありますので、その委員会が、国際色豊かな委員たちが会議を行って、そこで決定したことを本会議に持ち寄って、適宜声明を出すとか、何なりに持っていくという、そういうプロセスです。

それで、きょう午前中、獄中作家委員会（ライターズ・イン・プリズン）とっていますが、これは先ほども申しあげましたように、国際ペン自体が、表現の自由を守ろう、弾圧される文学者を救おう、ということから誕生した団体ですから、この委員会は、国際ペンの活動の中でも非常に重要なものを持っている委員会であったわけです。それが、もう早速きょうの9時半から委員会を開始して、私、ちょっとあいさつをしてきたのですが、40くらいの会場に、本当に全部、簡単な自己紹介をされていましたけれども、あらゆる国とっていいほどいろいろな国の方々が集まって、それぞれの国が持っている迫害された作家の問題、あるいは自分の国にはないけれども、そういうことをどう考えるかというような会議をやっております。

平和委員会は、平和の問題をどう訴えるか、女性作家委員会は、やはり差別された状態における女性の作家のこと、というようなことを始めております。あと、子どもの本委員会とか、著作権の委員会とか、いろいろな委員会が、きょう、午後から、いまやっているところだろうと思います。

そういう形で、私どもとしては、世界の本当に、日本の方々に知っていただくにふさわしい文学者を1人か2人か3人くらいは呼びたいと、こういうことが通例になっておりますので、今回、人選をいろいろいたしました結果、ぜひということで、高行健さんが来てくださることになりまして、そして、きのう、基調講演をやっていただきました。その流れの中で、きょうここに記者会見をする、こういう事情でございます。よろしいでしょうか。

司会 ありがとうございます。高行健先生ですけれども、お手元の配布資料の中にも、主要な略歴は書いておりますので、そちらをご参

考にさせていただきたいと思います。

先ほど、ちょっとお話をお伺いしましたけれども、87年に中国を出国して以来、もう23年間中国にはお帰りになっていないということで、この間の中国の変化も非常に大きいわけですから、やはり依然として本については禁書という形になっているそうです。地下出版という形では中国の中で随分たくさん売られているわけですが、高先生の名前についても、中国政府は禁じているというようなことをおっしゃっていらっしゃいました。

きのうの基調講演を踏まえて、まずお話をいただきます。では、高先生、よろしく願いいたします。

政治と切り離れた文学に

高行健 ジャーナリストの皆様方、こんにちは。昨日、私は国際ペンの東京大会の開会式で基調講演をいたしました。そのときに、もしかしたら出席していた記者の方もいるかもしれないのですが、出席していなかった方もいるかもしれませんので、ぜひこの機会にお話をしたいと思います。

昨日の講演のテーマですけれども、「環境と文学 いま何を書くか」という話でした。この機会を通じまして、文学がいま現代においてどんな役割を果たすべきか、そういったことについて、お話をしたいと思います。

私が思いますに、文学と政治というのは、別々の2つのことだと思います。しかしながら、すでに過ぎました20世紀ですけれども、やはり文学と政治が非常に緊密な関係になりました、(文学は)政治に付随する、文学が副次的な役割を果たすような、そういった状況に陥ってしまいました。

また、政治に対して、文学が奉仕するようになってしまいまして、そしてまた、さまざまなイデオロギーによってもコントロールを受けるような状態にありました。このイデオロギーというところではマルクス主義ということでは

すけれども、文学によって社会を変えていこう、そういった動きがありました。

そしてまた、この20世紀ですけれども、反マルクス主義といったものも出てきました。昨日申しあげたことなんですが、こういったものによって文学は、政治的な影響を受けるのではなく、独自の自主の道を歩かなければならない、そして文学の独自性を保たなければならぬ、ということを申しあげました。

要するに、私の主張としましては、文学はもとも持っている本線に帰らなければならない。そして政治とは切り離れた、政治的な功利とは切り離れたものにならなければならない、というようなお話をいたしました。

しかしながら、そうはいいまして、政治ですとか社会の問題を、文学は回避するわけではありません。文学は、政治を離れるわけではありません。ということで、文学は十分に自由な分野であると私は考えています。

そしてまた、政治的なことですが、私どもの生活の中のいろんな分野に浸透しています。市場的な利益というもの、それが社会の中にも、そして文化の中にも浸透するに至っています。

この独立的な思考によりまして、人の生き生きとした問題を書くこと、そういった文学がいろいろな政治的なコントロールを受けるようになってしまっています。そしてまた、市場の制約も受けています。

というのはどういうことかといいますと、発行の制限です。文学がそういった発行を通して、市場を通して読者と向き合う、そういった機会も奪われるようになってしまっています。要するに、市場で売れるかどうかというところ、そこが問題になってきてしまっています。

そして、もし作家が、いま現在ですけれども、思想の自由、それから実際に考え方の自由、そういったものを得ようとするのであれば、やはり人に対する考え方、社会に対する見方、それから政治に対する見方、こういったものが国による政党政治の影響を受けることなく、そしてまた市場の圧力を受けないようにしなければ

なりません。

現代社会を生きる人間の存在を書く

しかしながら、こういった中で人として、そして作家としまして、自分自身の独自の考え方をしっかりとあらわしていこうとするのであれば、文学を、表現をもって、それによっていまの人の意識をしっかりと表現していかなければならないと思います。

こういった中にありましても、やはり文学が何もできないということではありません。大衆的な市場に迎合するようなことではなく、そしてまた政治的な干渉をされる中で、そしてまた文学作品が制限されたり検閲されたり、そういった状況がある中でも、やはり作家として独自の考え方を持っていなければならないというふうに思います。そのことによって、現代社会を生きる人間の存在、人間の確認について、そういったことについて書いていかなければならないと思います。

ということで、このような中にありまして、文学というものですけれども、実際には国権ですとか、政治ですとか、それから民族文化ですとか、そういったものの距離がますます広がってきております。そしてまた、これが世界に通じるような普遍的なものになってこなければなりません。そのことにより、人の生存について描くべきであります。これは政治的な正確性ですとか、イデオロギーとか、そういったものの制約を受けるものではなく、そういったものを超越するものであるべきであります。

そしてまた、このたびのペン大会のテーマですけれども、「環境と文学」でありました。環境の問題ですけれども、これは人一人ひとりにかわってくる、皆さんがそれについて非常に焦燥している、焦っている、そういった問題であります。ですから、これもまた文学の一つのテーマになり得ると思います。

そこで描かれる文学のテーマですけれども、それは何も国ごとの制約を受けるものではなく、

く、そしてまた言語ごとの制約を受けるものでもなく、これが人類の普遍的な生活をしている環境というものを反映するものであります。そこで描かれる文学はグローバルなものであり、共通の問題に立ち向かっていく、そのような普遍的なものであるというふうに思います。

先ほど私は、文学の現代社会における困難についてお話しさせていただいたんですが、これも、まさに人間が現代社会において生きていく際の困難にも共通するところがあると思います。ここでいいます困難ですけれども、これは何も一つの国ですとか、地域ですとか、特殊な人々ですとか、そういったことにかかわるものではなく、普遍的な人類共通の困難だというふうに思います。

ですから、いま、このような時代にありまして、民族のアイデンティティーですとか、国のアイデンティティー、もしくは伝統文化のアイデンティティー、そういったことをいうのは、文学にとっては意味がないと思います。そしてまた、ここでいうアイデンティティーというのは、まさに国家の権力、それからイデオロギーが生んできた、そういった概念だと思います。

文学には文学自身の言葉があり、それはまさに人類、人自身の言葉であり、それから人が生きていく生存についての言葉であります。文学は環境から切り離せませんし、そしてまた全人類が直面する普遍的な問題からも切り離して考えることができません。ということで、文学そのものも全人類に共通する普遍的なものになる、と思います。

人類の出口はどこにあるのか

このことにつきましても、まさに昨日の私の講演の中でも申しあげた点なんですけれども、文学が、こういった人々が生きる環境、その環境がまさに困難に直面している。環境の悪化、さまざまな汚染ですとか、そういったものがあります。そしていま、制限のない盲目的な開発の問題もあります。それからまた、グローバルな金融危機の問題というものもあります。

その出口は一体どこにあるのでしょうか。こういった人類の出口は一体どこに見つければいいのでしょうか。これは文学だけの問題ではありませんし、政治だけの問題でも、経済だけの問題でもありません。

このような現実の問題に直面して、それを解決する方法があるのでしょうか。少なくとも私自身の言葉に照らしていえば、私たちにその解決法はないことを認めざるを得ません。いいかえますと、これは経済危機だけではなくて、非常に深刻な思想、思考の危機の時代であるといえます。

ですから、私たち作家だけではなくて、すべての人々、これは政治家も含めて、どのような問題に対しても妥当な解決法を見出すことが非常に難しくなってきました。そして、このことがいま現在の大きな課題となってきました。このことは、いま、せつかくの機会ですので申しあげさせていただきたいと思います。このことをディスカッションできれば幸いです。

以上、私からの簡単なお話をさせていただきましたけれども、この後、質疑応答に入りたいと思います。どんなご質問でも結構ですので、お聞きください。

＜ 質 疑 応 答 ＞

司会 高先生、どうもありがとうございます。これから質疑に入りますけれども、時間は十分にありますので、会場の皆さんからもどんどん質問を出していただきたいと思います。ちょっと司会のほうから、1～2 問、最初に質問をさせていただきます。

先ほど、文学と政治は別だというお話を聞いた直後に政治絡みの話を聞くのは恐縮なんですけれども、先生の文学作品にも影響を与えているといわれる天安門事件について、ちょっとお伺いします。先生は海外で天安門事件のニュースをお聞きになったと思いますが、天安門事件というものが先生の中国に対する考え方であるとか文学作品にどのような影響を与えた

かということについて、お話をお伺いしたいんですけれども。

パリで知った天安門事件

高 私は、天安門事件のときに、ちょうどパリにいました。そのときはちょうどフランスとドイツから招かれておりまして、作家、芸術家として招かれて外国を訪問していたところでありました。

ちょうど1年間、芸術作品の創造のための時間をいただいております、自由にその創作活動にあたっていたわけです。そのときに『靈山』という作品を書きあげました。天安門事件が起き、そして虐殺が行われたという知らせを聞きまして、小説を書き続けることができなくなってしまいました。そのとき、フランスのラジオでは、15 分ごとに天安門で何が起きているかを報道しておりました。

その虐殺のニュースを聞いた後に、私は中国に帰らないと決意いたしました。もう帰る必要がないなということ、帰れないのでも構わないし、帰る必要はないと思いました。私は『靈山』という小説を執筆していましたが、ちょっと筆がとまってしまいましたけれども、なるべく早くこれを書き終えてしまおうということで、1 カ月以内に終わらせて、その後、私自身は国を追われて流浪の生活に入ることになりました。

当時は、この事件が発生してから、フランスのテレビ局や新聞からの取材を受けました。そして、取材を受けたときに、私は中国政府の虐殺行為を批判いたしました。このため、私は中国に帰ることができなくなりました。

そして、この事件が直接的に私に一番影響を与えたというのは、私はこの事件を受けて『逃亡』という脚本を書きました。この戯曲を執筆したわけですが、天安門事件が終息をいたしましてから、パリにたくさん国を追われた人たちが参りました。その中には、私の友達である作家もおりまして、そのときに、天安門で何が起きたかと知ることができました。

その後、アメリカのほうから依頼を受けまして、ぜひ天安門事件に関する戯曲を執筆してくれないかという依頼を受けましたので、私はすぐにこの依頼を受け、そして天安門事件、そして民主化運動を題材にした戯曲を執筆いたしました。そのアメリカからの依頼は7月、あるいは8月に依頼の手紙を受け取ったわけですが、9月にはその作品は完成いたしました。そして、できた原稿をすぐにアメリカに送りました。

そうすると、アメリカの劇場のほうから修正を加えてほしいという依頼がありました。なぜその修正を依頼されたのかがすぐわかりました。というのは、その劇の中に、アメリカ的なヒーローが登場しないからです。私はアメリカ側にこういう答えをしました。「私は修正をするつもりはありません。もし中国当局が修正しろといっても修正しないのですから、アメリカの劇団に修正しろといわれても、脚本を直すことはありません。修正をしないので、上演していただけてなくても構いません。原稿料も要りません」と、拒絶をしたわけですが、この戯曲自体、脚本自体は発表されました。

すべての公職を解かれた

発表されたときに、一連の出来事が中国国内で起こりました。同じタイミングで起きたわけですが、そのときに私の家が没収をされた。そして、私は中国のすべての公職を解かれ、それから中国共産党からも除外をされてしまったという一連の状況が起きました。

この脚本は、中国の民主運動にかかわる友人たちからも批判されました。なぜ批判したかというと、アメリカの方と同じような考え方だったと思いますけれども、彼らが求めるようなヒーローが出てこないからです。

しかしながら、ヨーロッパの人というのは、おそらく思想的に寛容である。あるいは、もう少し奥深い複雑な思想をお持ちなのだと思います。一番最初に上演されたのがスウェーデンのロイヤル・シアターでありました。その後、

この劇は世界の各地で上演されることになりまして、日本でも上演されたと聞いております。東京に小規模ながらも劇団があって、そこで上演をしてくれたと聞いております。

この劇は絶え間なく上演されておりまして、アフリカでも上演されておりまして、今回事業に来る1カ月くらい前に手紙を受け取ったわけですが、上演されているということ。それから、元ユーゴスラビアのスロベニアでも上演されていると聞いております。

ですから、この作品は発表されてから20年たっているわけですが、いまでも古いものではなく、まだ新しいものとして生き続けております。

司会 どうもありがとうございました。それでは、会場の質問を受けつけます。

質問 徐福伝説というのがありまして、徐福が日本に来たのはいまから2200年前だといわれています。ちょうど2200年記念の式典を日中韓3国でやろうとしていると聞いております。徐福も、実は自由を求めて中国から亡命したのではないかと。高さんもその徐福の末裔ではなかったかと思しますので、コメントをいただければ。

高 私、今回の来日でこれが4日目になるんですけれども、すでに3つの博物館を訪問しました。飯塚先生（飯塚容・中央大学教授）が案内してございまして、そのようなところをすでに見学し、日本のことをよく理解しようと思っております。

（通訳の説明：江戸時代の作家、仙崖の絵）この絵を、中国にはないので、こちらで初めて拝見しました。よく禅の精神というものがこの絵にあらわれていると私は思いました。

私は、この禅に非常に興味を持っているんです。私自身、以前に書きました脚本の中に『八月雪』という作品があるんですけれども、この中にも禅の精神が、これはオペラの形で上演をされたことがあるんですけれども、そこにも禅の精神が含まれた内容になっています。

それで、私も今回この絵をみせていただいた

んですけれども、日本の文化の中にも禅宗の影響がいろいろなところに残っている、ということも今回理解することができました。

質問 日本について、3つの質問です。日本に初めていらしたんでしょうか。日本についての総体的な印象はどうですか。

2つ目の質問は、高先生は南京で子どものころ大きくなっていると思いますが、南京大虐殺についてお聞きになったことはありますか。こういう日本の中国侵略の不幸な歴史について、どんな考え方をお持ちですか。

3番目、最も好きな日本の文学作品は何でしょうか。川端康成、大江健三郎、村上春樹の作品をお読みになったことはありますか。村上さんはノーベル文学賞を取ると思われますか。

以上です。

小さい時の記憶は日本軍の爆撃

高 日本に来まして、毎日、何をみても非常に新鮮に感じます。きょうで第4日目なんですけれども、日本の文化はすべてが精緻にできているというのが私の印象であります。どんなものであってもです。それは、文化、芸術、食べ物、いろいろな装飾品に至っても、非常に精緻に、非常に美しいものがたくさんあるな、という印象を持っております。滞在が日を重ねるにつれて印象もどんどん深くなってくるというのが実感です。

日本の生活の質についてみますと、やはり日本のライフスタイルは、生活と審美眼、美というものが密接に結びついていると感じました。これからなるべくたくさん日本のものをみたいと思いますし、たくさん日本の人と知り合って交流をしたいと思います。私は中国人ですので、中国のものについてはあまり興味ありません。

それから、2番目の質問、南京大虐殺についてですけれども、南京の事件が起きたときは、私はまだ小さかったのです。私は1940年生まれです。そのときは、実は南京にはおりません

でした。私の家は、父が国民党の時代の政府の中央銀行に勤めておりまして、その小さな部門を統括する中間管理職でありました。その銀行が撤退することになりまして、その撤退の途中に私が生まれたという経緯になっております。

撤退の途中で生まれたと申しあげましたが、江西省の贛州（かんしゅう）というところで生まれました。母が語ったところによりますと、私が生まれたその日は、夜、日本軍の爆撃機の爆撃を受けている最中であつたと。紙を張った窓ガラスがバリバリと揺れている状況でありまして、私の小さいときの記憶は、日本軍からの爆撃、そして空襲警報というのが私の記憶です。

私の家が南京に移ったのは1951年のことでして、その後、南京大虐殺に関する展示をみることができました。これは一つの歴史の悲劇であると感じております。

私の希望は、日本人であっても、中国人であっても、このような過ちは絶対に繰り返してはならないと思っております。そして、たびたび政治的な利益、それから紛争によっていろいろな戦争が絶えず起きているわけですけれども、戦争は非常に愚かな行為であると思っております。

先ほど、名前が挙がった3人の作家の作品は、私はすべて読みました。村上春樹さんの作品も読んだことがあります。『ノルウェイの森』を読んだことがありまして、感想としては、非常にモダンな作品であるということで、やはり若い人に村上春樹ファンが多いというのは、理解できます。よくわかります。

それから、大江健三郎氏ですけれども、私と大江さんは友達でありまして、2回お会いしたことがあります。以前、フランスでも対談したことがありまして、きょうもこれから大江先生との対談が予定されておりまして、私は大江先生の作品、大好きであります。

それから、川端康成も私の好きな作家であります。中国語に訳されているものはすべて読みました。彼が表現しているのは、精緻な、細かい、そして伝統的な日本の美を表現されている

と思います。

作家としては、三島由紀夫の作品が好きであります。政治思想的には、彼はちょっとファシスト的なところがありますけれども、作家としては、文学作品は、彼の作品は大好きです。

それから、村上春樹さんのノーベル賞受賞については、ノーベル賞の選考委員会のことでありますので、私にはわかりません。

質問 中国の大国化に伴って、世界的に中華ナショナリズムが高揚しています。20 年前、世界の中国人は、共産党による学生、市民の虐殺に対して抗議の声を上げました。2008 年の北京五輪では、世界の中国人は、聖火リレーに抗議するチベットの人権活動家たちから、聖火リレーを守る行動に立ち上がりました。海外で暮らす一人の中国人として、このような変化について、どう思われますか。

民衆から起こるナショナリズム

高 私は少し心配しているところがあります。もし、中国の経済が飛躍的に発展する中で、はっきりとこのような無制限なナショナリズム、そういったものについての認識をしないと、それはまずいのではないかというような憂慮があります。

今後の中国の政府、指導者の人たちが、こういったことについてしっかりと、はっきりと認識ができるかにかかっている、と思います。このようなナショナリズムがどれだけ多くの危害をもたらすかということについて。

しかしながら、こういった民族主義ですけれども、これは何も政府の側から来るものだけではありません。普通の人々、民衆の中から起こってくるものもあるかと思っています。強権主義的な、そしてまた集団主義的なことについて、こういった悪いことがあるかについて、しっかりと認識をしないことは、やはり憂慮すべきことかと思っています。

これは日本人であれ、中国人であれ、そういった歴史を持っていると思います。日本につき

ましても、第二次世界大戦時の軍国主義がありました。これは何も天皇が一人で引き起こしたことではなく、やはり人々の中にもそういったことがあったので、問題も起きてきたと思います。日本にもありましたし、それからまたヒットラーのファシズムですけれども、何も歴史をもってヒットラーだけを責めるわけにもいきません。どうしてかといいますと、これもまた人々が選挙によって選んだ政権の選択であったからです。

そして、文化大革命についても、もちろん毛沢東自身も、この誤り、罪というものの、そういったことについての責任を逃れるわけにはいかないんですけれども、もう一方の面でみますと、中国の文化大革命も非常に大きな大衆の、群衆の運動であったという側面もあります。

多くの人たちが無残に殺されたり、つかまったり、いろいろな目に遭ったわけですが、それは何も国家権力とか、警察によってつかまえられてそういった目に遭った人たちばかりではありません。普通の人々によって行われた面もありました。

ですから、人類が、このような集団主義的な動きを避けることができるかどうか、そのことについては大いに考える必要があると思います。

文学は、もしかしたら少しは役に立つかもしれませんが。人々の中に、そういった傾向、そういった部分があることを知らしめる、そういった役割があるかもしれません。私の『ある男の聖書』という小説があるんですけれども、その小説の中でもこういったことに言及をしています。

文化大革命について、さまざまな本が書かれてはいるんですけれども、その中で、やはり多くの本が、こういったことにまで言及はしていないと思います。文革は、こういった群衆、大衆の運動、盲目的な運動の中でいろいろな問題があったということ、このことについて書かれているものはそれほど多くないと思います。要するに、そういったことについて書かれているものがあまりないと思います。

個人のことにについて書かれているものが少ないと思います。ですから、人間が持っている狂気というもの、そのことについて認識をしておく必要があるかと思います。

魯迅の後期は文学と政治を切り離せなかった

質問 1つ、魯迅は、中国近現代文学で最大の作家と思いますが、もし魯迅が生きていたら、という質問に高先生はどう答えられるか。2つ目は、いまの中国現代文学について、先生はどうみていらっしゃるか。

高 魯迅はもちろん、中国の近現代作家の中で一番偉大な作家であると思います。20世紀の中国文学の中で何を読むかといわれれば、やはり魯迅が一番であると思います。

しかし、私は魯迅に対してもちょっと批判的な見解があります。というのは、魯迅の後期の作品ですけれども、文学と政治を切り離すことができなくなってしまっていたのです。彼もまた、時代の病を避けて通れなかったわけですし、それは文学が政治に介入をすること、そして文学革命、あるいは革命文学、そういったものを避けられなかったということです。

彼は、随筆、雑文といったものもたくさん書いておりまして、それが政治と往々にして関連が深いわけで、それはもちろんそれで役に立つわけですが、実はそういったもののために、この優秀な作家の才能を使ってしまったことが非常にもったいないことであると思います。

それから、現代の中国の文壇についてですが、私が中国を出る前のことはよく知っていますけれども、中国を離れてしまってからのは、あまりよく存じあげておりません。そして、中国文学の状況については、私は、極端に言えば、本当によく知らないというのが本音のところであります。私は中国を離れてから、中国の現代作家が書いた小説を全く読んだことがないといってもいいと思います。ですから、コメントはちょっと難しいと思います。

質問 グローバルな金融問題とか環境問題

とか、人類が大きな問題に直面する中で、作家も解決策を見出せないといわれました。一見悲観的な話のように聞こえるんですが、先生ご自身は、そういう中で可能性を持っていらっしゃるからこそ、そういう言い方をされたのではないかと思います。そういう危機的な状況の中での文学の可能性、もしくは言葉の可能性について、どういうふうに考えていらっしゃるか。

解決法を見いだせないことを認める

高 きこの講演でも申しあげましたけれども、文学は決して世界を改造する、変えることはできません。それができると考えるのであれば、それは妄想であると思います。私たちは、自然の発展、社会の発展の法則について、あまりにも知ることが浅過ぎる、知らな過ぎると思います。

ですから、知らないことを認める、解決法を見出せないことを認めることが、現時点では、世界を変えられる、世界をいいものにできると言うよりも意義があると思います。それがいくらかであっても、はっきりした、覚醒した認識であると思います。こういった認識があればこそ、人々をさらに再認識への道へと駆り立てることができると思います。

そうすると、ここで哲学の認識論の問題とかかわってくると思います。20世紀は過ぎ去ったばかりですが、ここで私たちが非常に影響を受けたのはヘーゲルの弁証法であると思います。その弁証法で出てくるのが、否定の否定です。否定の否定は、結局、肯定につながるということですけれども、これを社会に照らしてみますと、革命ということになるかと思います。革命は、前政権を否定して、前政権をひっくり返して新しいものをつくること、それがまた転覆されるということがあります。前政権を否定し、そして自分たちが主人公になる、そして自分たちがスーパーマンになって絶対権力を打ち立てる、その過程が繰り返されてきたといえます。

私は、このような考え方をあきらめました。

いま持っている考え方というのは、非常に簡単な、シンプルなもの。認識をする、そしてまた認識、再認識をする、その積み重ねです。

いま私たちが直面している危機に関しては、私たちはその認識のための努力を惜しまないというべきでありましょう。それしか方法はないと思います。

経験にもとづく自分自身の認識が出発点

質問 政治と文学の距離について、文学は政治から離れるべきだといわれたと思います。ただ、どうしても人種、民族、移民といった政治性を、生きている限り身にまとってしまうものですが、そこからどういうふうに距離をとり、どのように文学に取り組んだらイデオロギーから自由になれるとお考えなのか。そのうえで普遍的なものを目指すといわれましたが、その普遍的なものとは、具体的にはどのようなものを考えていらっしゃるのか。

高 文学というもの、それが政治に追随するものであってはならないと思います。文学は、やはり社会を知る、そして自分を知る、そういったところが出発点になるものだと思います。

そこで、認識、認知という過程が必要になってくると思うのですが、それはイデオロギーとか理論とか、そういった枠組みの制約を受けるものではありません。哲学とか理念とか、そういった枠組みの制約を受けるものではあってはならないと思います。

要するに、実際にどのように本当に人が生きているか、個人がどのような困難な状況に位置しているかということ、そこをしっかりと認識するところが出発点になるべきだと思います。要するに、ここでいう認知、認識とは、個人の自分自身の認識だと思います。他人のものではありません。自分の経験に基づいた認識だと思います。もしこういったことができるのなら、イデオロギーとか、政治とか、そういったところからも距離をとることができるのではないかと思います。

2つ目の質問です。普遍的なものですけれども、人間性だと思います。この人間性というのは、相通じるもの、相同じものだと思います。どういうことかといいますと、異なる人種であっても、同じもの、通じるものがあると思います。黒人であれ、白人であれ、アジアの人であれ、アフリカの人であれ、そういったものがあると思います。

ですから、人間性というものは、人種にかかわらず、民族にかかわらず、そして言語がどういった言語か、にもとらわれないかと思っています。もちろん、言葉は通訳、翻訳をしなければならないとは思いますが、その後ろにある考え方は共通性があると思います。

普遍的な人間性ですけれども、人間の悠久に及ぶ非常に長い歴史の中で形づくられてきたものだと思います。これがアフリカの人であれ、ヨーロッパの人であれ、どこの人であれ、そういった共通のものがあると思います。こういった一番基本的な人の感情というものの、例えば、そこには哀れみ、憐憫の感情があるかと思うんですけれども、それはどういった宗教を持っているかにもかかわらず、もしくは宗教がなくても、無神論者であっても、もしくは神様を信じるとしても、そのような同じ気持ちというものは、人間性として共通のものだと思います。

例えば、恐れ、そういった感情も、例えば戦場とか、そういったところに身を置かれて恐れない人はいないと思います。ですから、こういった根本的なもの、人間が、文明とか文化とか、そういったものを形づくる、その発展の中で形づくられてきたものだというふうに思います。

こういった基本的な感覚、感情というものの、それから良知というものの、それにも共通性がある、それが普遍的なものだと思います。

文学とか、芸術とか、そういったものの普遍的な共通性は、これはイデオロギーを指すものではありません。人類そのものが形づくられてきた、その中で形成されてきた人間性がまさにそれであり、ということで、これはイデオロギーではありません。

「文明の衝突」はアメリカのイデオロギー

質問 9.11 の同時多発テロが起きた後、21世紀は文明の衝突の世紀であるといわれます。現状に関して、どうお考えでしょう。

高 文明の衝突ですけれども、これはアメリカのイデオロギーである、新しくできたイデオロギーであると思います。アメリカのある教授が書いた「文明衝突論」でして、アメリカが世界に向けて発している一つの概念であると思います。

この 9.11、同時多発テロ、イコール戦争であると私は考えています。20 世紀の末からテロが絶え間なくいろんなところで頻発しています。新しい形の戦争であると思います。それから、アメリカのイラクへの侵攻、これも戦争であると思います。中東やイスラム国家のアメリカに対する反応が、テロという形であらわれています。

テロは、みたところ、宗教上の矛盾から衝突が起きているようにみえますけれども、これは利益の衝突にほかならないと思います。ほかの戦争と変わらぬ、具体的な利益、利害が背景にあると思います。

いま、国際的な中でいろいろな衝突が起こっています。戦争は避けられないといっていると思います。根源として、さまざまな利害関係、利害の衝突があるからだと思います。

中国では出版できない状態

質問 ある人から、高さんの作品は中国で解禁になったはずだという話を聞いたのですが、どういう形でいま禁書の状態なのか。すべての作品が中国国内では出すことができない状況なのか、あるいは何らかの理由をつけられて、出しにくい状況を指しているのか。

国際ペンの招待作家として参加されたのですが、フランスのペンに所属されていると理解していいか。国際ペンの人権とか獄中作家の問題がありますが、どういう考えでいらっしゃるか。

高 まず最初の質問ですけれども、いま正式には、中国ではすべての作品が出版できない状態です。しかしながら、地下では、要するに海賊版は売っているという話です。私の知り合いが中国の大陸でそういったものを買ってきてくれたんですけれども、いま買えるとしても、『靈山』という作品しかないということであります。その『靈山』ですが、私の持っているバージョンしかないのかどうかよくわからないのですが、そのバージョンの表紙に載っている写真も、私自身の写真ではなかったです。

どうして出版禁止なのか、禁書なのかということについては、中国政府の当局者のほうに聞いていただければいいと思います。

今回、私自身は初めて国際ペンの活動に参加しました。日本ペンクラブの阿刀田会長の温かいお招きを受けて、こちらに参ったわけです。私自身はペンクラブの会員ではありません。しかしながら、各地のペンクラブのお招きを受けて、いろいろな活動には参加したことがあります。2 年ほど前ですか、スウェーデンにも、招きを受けて行ったことがあります。

国際ペンの活動は、これは常設機関でして、活動の範囲も非常に広いものです。私自身もそれらのすべてに顔を出して参加するということとはできないかと思います。

今回、東京に参りまして、この国際ペンを通して多くの友人、作家の友人の皆様と接触する機会を得ました。私は身をもって感じたんですけれども、国際ペンというのは、国とか、国家権力とか、政治とか、そういったものを越えた、まさに作家による組織だということ、それについて深く印象を覚えました。ペンの活動の範囲の中で、十分な言論の自由というものがあります。そういった状況だと思います。

司会 非常に広範なテーマについてお答えいただきまして、どうもありがとうございます。もう一度、高先生に拍手をお願いします。（拍手）

文責・編集部
通訳・青山久子、渋谷千春
(日本コンベンションサービス)